あさ 7

2022

亀田虎童子

耳掻きをあつかひかねし熱帯夜

異国より辿りつきたる夏の蝶

風景をいつかはみ出るもつれ蝶

生きてゐることにこだはる酷暑かな

似顔絵の似てゐないクレヨン折れし夏

長い橋渡る天より蝉の声

あを

七月集

佐藤　竹僊

妻に書くHuyu（冬）-gaki（柿）といふ色インク

菜園に人居ぬときの芋戰ぐ

月ひとつ富士の裾野に瀧七つ

たんぽぽにひょいと下りたるり一輪車

ついでにと鋏で春の水を切る

遊ぶ子の会話たのもし夕長し

下草の花ざかりなり柿若葉

白山吹雨の匂のつねにして

風薫る

秋川　泉

亀鳴くや四方の山に日は高く
強風や一面に散る花銀杏
夜の川を群れて泳ぐや鯉幟
走り梅雨亀ながながと天仰ぐ
立ち話長引くひとに薔薇を切り
自転車の法衣なびかせ風薫る
黒法衣うすものの背の荒き息
夜の森山百合の香に誘はれ

九州旅

七郎衛門吉保

筑後川組子屏風にえつ泳ぐ
柳川に歌碑と鰻とどっこ舟
埋め尽す新茶の畝や八女の丘
黒川の湯巡り木札風薫る
小国町「新札」石楠花賑々し
走り梅雨草の千里も五里霧中
九州で聞く老鶯や男前
五十年前の母の日ドル・セント

東をどり

篠田純子

東をどり老妓の腰の確かなり
幕あひの立ち飲みコーナー冷酒飲む
東をどりの口上大むかふより「新橋！」
東をどり「出の帯」揺るる総踊り
つばめの巣覗き燕に睨まるる
日比谷サローにあをきトゥクトゥク新樹光
墓経（はかぎやう）の僧青つむり汗ひかる

死語の森

篠田大佳

夏来たり家の厨の小宇宙
東京の路地にボールの跳ぬる夏
厭戦の街のタルトにとまる蜂
夏の雨ひかりは罪を裁かない
夏なかば朝を目指して死語の森

題五月

須賀敏子

万緑の玉川上水淵深し
山に入るまず郭公に迎へられ
躑躅咲く那須の五岳のくっきりと
躑躅園マスク外して深呼吸
はつ夏やペットボトルの蓋かたし
茶畑の嫩葉優しく摘み取られ
ノーウォーと呟きながら新茶汲む
妹の田植も今年限りなり

草むしり

長崎桂子

新緑や野外集会笑の渦
嵩を増し大小泳ぐ初夏の川
ラジオは「夜のプラットホーム」昭和の日
主張と攻撃はげし憲法記念日
陽射し来るクローバー開花の華やかに
柿色の草の花初夏を賛美して
頭上すぎ日は西へ寄り草むしり
庭一面草は新鮮草むしり

雑詠

森なほ子

武具飾る戦火の国を思へども
さざ波や今年も五羽の残り鴨
鴨帰り烏も啼かず日暮かな
高き幹より子烏の甘え声
巣立烏まはり離れぬ親烏
見えねども街に鶯声馴染み
蛙鳴く三年ぶりの故郷なり
山墓や白鬚なびく翁草

夏旅

赤座典子

麦の秋黄金の波に目眩く
殿様の庭に住みゐる牛蛙
葉柳のゆらりと触れてどっこ舟
アミューズは茶葉の天ぷら夏料理
花蘇鉄女人(ひと)声高に早口に
緑陰に城の石垣寄せられて
噛み合はぬ話のあれど柏餅
沈黙といふ黙認を悔ゆ蛍の夜

炑收集

揚羽蝶吾家覚えてゐるらしや　亀田虎童子

そそそそと空を滑りて花筏　佐藤　竹僊

歯痒き日々ざくざくと切る春キャベツ　赤座　典子

天空に花舞ひてなきひといずこ　秋川　泉

句会ありそよそよと行く春袷　七郎衛門吉保

仮名文字を書くやに揺れる藤の房

弾みつけすすむ雲梯若葉風　篠田　純子

エンジンのまだふるへある穀雨かな　篠田　大佳

真夜中の卓に草餅推敲す　須賀　敏子

目が合ひし石竹の鉢を買って来　長崎　桂子

売りに出し家に灯ともる春の暮　森　なほ子

最新は最後に同じ春の雪

文鳥と演歌聴いてる昭和の日　赤座　典子

夜の三毛花ふわふわと降りかかる　秋川　泉

東欧路初音を待てぬ逃避行　七郎衛門吉保

既視感の桜並木を浮遊する　篠田大佳

桜蕊踏んで五千歩誕生日　須賀　敏子

桜草十八歳は成人に

産物を育てる鈴鹿颪かな　長崎　桂子

体温もプライバシーと亀鳴きぬ　森　なほ子

喜孝抄

五月号作品より

篠田純子・篠田大佳・佐藤喜孝

大木は揺れ戻すなり青嵐　　亀田虎童子

「亀田虎童子さんの頁」を空欄にするのが淋しく、まことに失礼とは思ひながら旧作の中から当季の作品を載せさせていただいた。

この句は一九九〇年四月の「二土の会」と称する『暖流』支部句会で発表された。青嵐のさまが大木が揺れ戻る動きの中に見事に捉えられてゐる。写実に徹した句は時を経ても鮮度が落ちない。よく阿部寒林さんが句会で選をしておきながら時事句に対し「賞味期限付きの俳句」といはれた。それとは対極の作品。私の「俳句成分」の大半はこの「二土の会」で育まれてゐる。いつか「二土の会」のメンバーの俳句を紹介してみたい。（喜孝）

みじかくも長くもなければまくわ瓜　　亀田虎童子

「まくわ瓜」に夏休みに行った、新潟の祖父母の家を思い出しました。家の前を小川が流れていて、天然の冷蔵庫よろしくまくわ瓜や、ぶどう、サイダーが冷やしてありました。とりわけまくわ瓜は種の所がとても甘く、小学生の私には最高のおやつでした。今はメロンが幅をきかせていますが、忘れられない味です。「みじかくも長くもなければ」の表現に俳味があり、流石と鑑賞致しました。（純子）

雄叫びもなく日の暮れし蟻地獄　　亀田虎童子

蟻と蟻地獄の世界には声がないと詠む作者です。光だけの世界の中で食うか食われるかの攻防が起きながら、日が昏れていきます。生存の戦場には声がないのです。（大佳）

ミサイルの跡を啄む春の鳩　　佐藤竹僊

文学に「ポストアポカリプス」というジャンルがあります。破滅の後の世界を描くジャンルをそう呼ぶそうです。ポストアポカリプスとまではいかないにしても、文明に住んでいる春の鳩とは読感がガラリと変わり、瓦礫の上の強かさと軽やかさを感じます。（大佳）

下校兒ひとりおほあらせいとうのほとりゆく　　佐藤竹僊

菜の花の底抜けな明るさと対比して、むらさき色の大紫羅欄花（諸葛菜）に、落ち着きと、寂しさを感じます。転校生で、まだ友達できないのか？煩わしい友人関係を、避けているのか？とても気になる生徒です。「ほとりゆく」に坦々と歩く児童が見えてきます。（純子）

陽炎や花札のやうゴッホの庭　　赤座典子

日本は視覚芸術が盛んですが、評価はさほど高くないように思います。ゴッホの絵のフォーカス

がぼやけた感じを想像しながら、日常生活に当たり前の意匠が、ゴッホの力を借りて素敵な構図に見えてきます。意匠は藤か萩を想像しました。（大佳）

霾るやウクライナには弾が降る　　秋川　泉

黄砂の自然と弾丸の人工物との対比を狙った句です。戦争は国家間のゲームの相と国民の生活の相の両面で語られます。この二つの視点での戦争と自然観が混ざり合った視点は、戦争という物語を読んだとき、人間の意思が自然と混ざり合い、自然観が揺さぶられます。（大佳）

句帖には田も穂もありて藤の花　　七郎衛門吉保

難解な句です。句帳の中に仕舞われた言葉は実りの言葉が込められていて、眼前に藤の花が広がっています。抽象と具象が混淆されています。「田」「藤」「穂」の折句表現は藤穂さんへの友情を表現されています。（大佳）

「彼岸に逝くは天寿まつたう」言ひあへり　　篠田純子

故人を偲ぶ会話を切り出した句です。悲しみと前向きな受け止め方は、故人への想いが複雑に絡みつきます。会話の体裁が、より心情を生々しく読者に再現させます。色々な最期はありますが、天寿と言えることは救いであったと思います。（大佳）

藤穂さんへ献杯そして花菜飯　　篠田純子

悼句はいろいろな詠み方があると思ふ。この句は日常の中でしみじみと故人をしのんでをられる。気負はず詠み「花菜飯」に至る。花菜飯がしみじみと、ほっこりと置かれてある。（喜孝）

夜の雨を花弁に受けて庭椿　　篠田大佳

藤穂さんのお宅のお庭に、紅椿と白椿があったと記憶しています。最後にお訪ねした時は、二輪ほど紅椿が咲いていました。雨粒か朝露か、水滴が光っていました。今思えば、紅椿の流した、お別れの涙だったのでしょうか。（純子）

別宅の庭を桜のワルツかな　　篠田大佳

前句と同じ情景の句か。「別宅」は藤穂さんの心の中を慮った措辞と思ふ。永遠の桜のワルツである。（喜孝）

さくら咲くすべて許してしまひさう　　須賀敏子

今年の前半は色々なことがありました。社会にも変化があり、「あを」でも変化がありました。蓄積されたやる方ない思いが桜によって解放されていきます。花を愛でることで作者の心持ちが変

わっても、現実が変わるわけではないという冷静さもまだ作者に残っています。（大佳）

桜の芽ほのと別れの時迫る　　田中藤穂

棲家を離れることへの区切りとして句を詠んでいる作者です。桜の芽は花咲く希望にも花散る哀愁にも読めますが、未来に対する作者の複雑な心境を映し出す季語であると思います。（大佳）

芽吹きして庭に賑はひ戻りけり　　長崎桂子

作者の暮らす庭の光景です。作者の庭では長い冬を越し春を迎えました。庭で暮らす植物や動物の動き回る様子が見えて来ます。冬を越した安堵も読者にもひしひしと伝わってきます。（大佳）

田中藤穂さんを偲ぶ

2022/2/9　撮 秋川　泉

悼

大山　夏子

田中藤穂さんの訃報は余りにも突然でした。残念としか言い様がありません。家が近いこともあり、度々お邪魔しておしゃべりを楽しんでいました。お互いに人恋しい年代になったせいか、声を聞かない日はないくらい、会えない日は電話をかけ合っていました。私の胸中にぽっかりと大きな穴が開いています。

亡くなられる前日、電話に応答がなく、翌朝早く訪ねましたが間に合いませんでした。

再びの声聴かせてよ春の闇　　夏　子

ラーメンが食べたい

宇都宮敦子

初めて藤穂さんにお会いしたのは「獐」の句会であった。俳句を始めて間もない頃で、竹内弘子さんに背中を押されるようにして出席したのであった。そのころの藤穂さんは七十才前後だったろうか。すでに俳人としても円熟の域に達していられて、嫋やかな中にも凛とした佇まいで女流俳人とはあんな風なのかと思っていた。縁あって私の俳句生活の大半、句座を御一緒することになった。

思い出と言えば、阿佐ヶ谷で句会があった時、私にとって忘れられない出来事があった。句会が終って阿佐ヶ谷商店街に出た所で藤穂さんが突然、洋服を買いたいので見てほしいと言われた。一緒に居られた秋川泉さんと三人で勝手な品定めをしながらアーケードの中を行ったり来たりして楽しい時を過ごした。それだけではなく、驚いたことにラーメンが食べたいと仰言ったのだ。そして此処で良いと目の前にあった店を目差してすっと入ってしまわれた。多分『日高屋』だったと思う。吟味もせず入った店であったが、それでも三人で「おいしい、おいしい。」

と言いながら食べられたのは嬉しかった。この時彼女は九十才近かったのではなかったろうか。後になって私は何度もその時のことを懐かしく思い出す。

自然体で行き、天寿を全うされたことは誠にお幸せで、羨ましくもある。

追悼句

花の雲絹の梯子を空にかけ　　敦　子

藤穂さんの思い出

斧田　綾子

『あを』三月号、藤穂さんの「お正月」五句、今となってはとりわけ「さようならの年になるかも暦替ふ」が身にしみます。骨太な精神とそれを支える体力を最近まで保持し続けた藤穂さん。お住まいに定家葛の花が匂う頃になると、道側にも沢山咲いて沢山ちる小さな花を丁寧に掃き寄せる藤穂さん。そろそろそんな季節になります。

定家葛一枝乞はれ由来まで　　藤　穂

お話を聴いて　その一

秋川　泉

藤穂さんの思い出は数々ありますが、その中でもお話しくださった忘れられないお話は、女学生の頃のお話。

お姉さまが高円寺にお住いになっていて、お母様が、お姉様の家に行ってあげてとおっしゃったので、台風か何かでとにかく大水が出た時の事。高円寺駅を出て、ものすごい雨風。道が分らない程の大水。そこをお姉様の家へ急ぐも歩くことも大変で、特に深い水の流れの所を通らないとお姉さまの家には行かれない。その時、前を歩いていた青年がつと手を出し、藤穂さんもその手を掴んで引き上げてもらった。それがなかったら流れが強く深かったのでどうなっていたか……と。大水に流されていたかもしれない。その時、生かされたからこそ、その後の人生があったので、あの時の命の恩人に、助けて頂いたお礼を云いたい。本当に有難く感謝していますと。

訪ねていったら姉はとても喜んでくれました。数日は姉の所で過ごしました。

とお話しになった。

それで今ここに私が、その方にお礼と感謝が届きますようにと願って記しました。

お話を聴いて　その二

義父様と義母様の話

婚家の義父様は、東京市の下水道を造る為ロンドンに調査に行かれた。その時の話。

暫くヨーロッパに行くため、自宅を留守にする旨、ご近所の芥川さん宅に、義父様は挨拶に行かれた。すると奥から、たいそう青白い顔色で体調の悪そうな芥川龍之介さんが出て来られて、挨拶を受けて下さった。そしてロンドンで龍之介さんの訃報を新聞で知ったと、義父様はお話になった。(龍之介・昭和二(一九二七)年七月二十四日・自死)

ご近所であったので田中家の子供も芥川家の子供も一緒に遊んだのでした。

婚家（田中家）の道をはさんだすぐ前に挿絵画家の岩田専太郎さんがお住まい

でした。芸術家は作品を生むのに苦しむ。すると、荒れる専太郎さんから逃れて、そのたびに田中家に避難する夫人。その夫人をいつも義母様がお世話されていたとのお話。

世の中に名の出て、立派な旦那様の陰で、妻になる人達は、人知れず耐えることが多くあったと伺いました。

ご近所には漆芸家の堆朱さんもいらして藤穂さんは、そちらからの御作品を日常に愛用されていました。

「回覧板をいつも届けに行ったのよ」と、懐かしく楽しく回想されていました。

お話を聴いて　その三

女行学生の頃のお話

共立女子で、新村玲子さん達と演劇『シラノ・ド・ベルジュラック』を演じられた話は、それはそれは楽しそうで、その話をされている藤穂さんはそのまま女学生でした。新村礼子さんは、その後素晴らしい女優になられました。藤穂さんは、卒業後すぐ二十歳で結婚され、田端のご自宅で生涯を過ごされました。「でもね　社会に出て仕事をしてみたかったと、今になって思うのよ」とお話になりました。

藤穂さんほどの聡明な方でしたら、社会の中でどんな活躍をなさったかしら…と、私は時々夢想するのです。

しかし、誰にも真似の出来ない立派な御生涯を、まるで物語のような人生の幕の閉じ方を見せてくださいました。私は、数々の物語を沢山聴かせて頂きました。とても幸せに思っております。

私の話も沢山聴いて頂きました。全ては私の宝物になりました。

藤穂さん、本当にありがとうございました。山々感謝申し上げます。

心からご冥福をお祈り致します。

藤穂さん吉保往復書簡

七郎衛門吉保

赤座吉保様

始めてお手紙差し上げます。

このたび佐藤喜孝様に句集「水瓶座」を作って戴きました田中藤穂でございます。その中に赤座様の十二支の絵を使わせて頂きまして有難うございました。

装丁は佐藤様にすべてお委せして、どの様なものが出来上がるか楽しみにしておりましたところ、とても素晴らしい句集が出来、その中の一年毎の十二支のカットが、斬新で瀟洒で、美しい表紙と共に皆様からお褒め頂いております。

お陰様で私の拙い句をひき立てていただきました。

御覧下さった方々が、こういう句集は始めて見ると、句よりも主に装丁の方を絶賛して下さいます。

本当に有難く感謝いたしております。一言御礼までにペンを取りました。

春ももうすぐそこの感じでございますが、どうぞ御身御自愛の上、御機嫌よくお過ごし下さいますようお祈り申し上げます。　　さようなら

三月五日

藤　穂

田中藤穂様

「水瓶座」のカットのことですが、お気に入れたとのことと、評判がよいとの報をいただき、提供申し上げた私としても望外の喜びであります。

このカットですが、人様と異なる年賀状を作ってみようと、切り紙の干支を考え始めたのがきっかけです。毎年２００枚ほど作るものですから、結構手間がかかり、毎年の暮れになると「今年はもう止めよう」と考えるのですが、他方で「来年はどんな切り紙が来るのか楽しみにしている」や「あれはオリジナルだから続けるべき」などをいただき、かれこれ20年ほどになります。

毎年、出来のよいものを数枚、アーティストプルーフとして取っておいたのですが、そのうちに紛失してしまう可能性もあるやと考え、２０００年の区切りの期に、12年一回り分の切り紙を額装にして保存することにしました。その額装の作成を佐藤先生に依頼申し上げ、今年の正月以降、我が家の和室を飾っておりま

す。

妻、典子が数年前より表装を趣味として始めたことが、佐藤先生を存じ上げる縁となり、そのご縁で田中様の俳句集のカットとなり、人の縁の大切さを感じている次第です。

何かの折がございましたら、額装もご覧いただければ幸いです。

早々

２０００年５月15日

赤座吉保

白山句会の藤穂さん

篠田純子

平成27年より大山夏子先生のお誘いで、吟行主体の、白山句会に参加させていただきました。藤穂さんは、すでに入会されていましたので、新参の私をなにかと気遣って下さいました。

吟行の日の待ち合わせの場所には、いつも一番乗りの藤穂さんでした。「まだ出来ていないの」とおっしゃりながら、良い句をお詠みになっていました。

藤穂さんの吟行句

重馬場に馬出てきたり花吹雪　（馬事公苑）

寺ひそと玄関に置く春火鉢　（牛天神）

古（いにしえ）の彩（いろ）や山王祭の列　（山王祭・行幸通り）

大亀が頭上を泳ぎ館涼し　（品川水族館）

フクロウは人間観察ビル涼し　（大手町牧場）

吟行場所は、羽田空港、水上バスでお台場、葉山、目黒の五百羅漢、酉の市、神楽坂……40数ヶ所を数えました。最後の句会は令和3年12月、藤穂さんのお宅が句会場でした。「今日は、とても楽しかったわ」と別れ際に微笑まれたので、私も幸せな気持ちになりました。

白山句会での藤穂さんは、ご年齢を感じさせない体力、気力があり、そしていつも笑顔いっぱいでした。

田中藤穂さんについて

篠田大佳

全身教養の人

藤穂さんが亡くなる数日前に、手土産を持って母とお宅を訪問しました。庭先を眺めて、雑談をいくつかしました。「心和し気平らかなる者は百福自ずから集まる」（菜根譚）というお話を伺い、教養の深さに驚きました。

悼句

桜まじいのちの消えたかなしみに

悼

須賀敏子

花冷えの日、藤穂さんの訃報が届きました。

優しい笑顔と素晴らしい俳句。そして凛とした生き方は、私の憧れでした。今はとても寂しいです。

花の冷え静かに発ちし藤穂さん

田中藤穂さんを偲ぶ

森なほ子

「あを」に入会して日も浅い？
私なので、藤穂さんとは句会でお会いするだけのご縁でしたが、小柄で親しみ安い笑顔の方でした。被講のお声もしっかりして今も耳に残っています。藤穂さんの句はさりげなく、また温かく、いつも共感の持てるお句でした。藤穂さんのような御生涯は皆の理想とするところではないでしょうか？

藤咲いて披講のお声懐かしき　　なほ子

追悼句

赤座典子

もう少し

行き先は「天国」といふ春の旅
笑ひつつ記憶確かに松の芯
野遊びや教はることの楽しくて
咲き満ちて旅立ち送る糸桜
もう少し昔話と桜餅

藤穂さんへ

佐藤喜孝

過日頂戴した田中健一郎さんのお手紙の一部をご紹介させていただきます。

私は俳句に造詣が深くありませんが、四月号の

椋鳥の一羽の去らぬ日暮れかな

という句は、母自身のことを投影している感じもして、哀しい気持ちもしますが、良い句のように思えます。母は日暮里で生まれ育って田端に嫁ぎましたが、日暮れという言葉の中に晩年という意味と共に地名まで想うのは考えすぎでしょうか。

この文章を読んで一番喜んでをられるのは藤穂さんでしょう。藤穂さんのほほゑむお姿を想像させていただきました。

句集発行など全く未経験な私に「私の句集を作って、句集の題は『水瓶座』でね。」

と大役を仰せつかった。安請け合ひしたのが始まりで、その後幾冊か句集制作のお手つだいをする機会に恵まれ楽しい思ひをする切っ掛けを作ってくださった。カットの写真は打合せで藤穂さんのお宅にお邪魔し、お住まいや什器を撮らせていただいたものと秋川泉さんの写真を使用しました。『水瓶座』を『沖』の林翔先生に読んいただく機会を得たと、藤穂さんは大変よろばれてゐた。左掲は翔先生が佳句と印をつけていただいた作品です。

『水瓶座』より　　林　翔　抄出

たんぽぽや憂ひなかりし日の青空
寒牡丹撮ると男のひざまづく
冬鳥のひそと来てゐてひそと去る
落日を追ひかけてゆく冬帽子
炎天の負け牛空を見て退る
夜々紡ぐ句やときをりは葡萄食べ
釣られきし金魚も泳ぎ新学期
病む師なほ心の支へ秋の蝶

喪服着て生けるしるしの汗しとど
烈震の島を残して鳥帰る
六行の遺書を諳んじ鰯雲
華道展芋の一葉に露活けて
ポインセチアに霧吹き
銀河濃き夜なり
花の夜の無言電話は黄泉よりか
落葉燃すわが鬱屈を火種とし

鳥雲に指切といふはかなごと
暁光や力充ちたる牡丹の芽
順調に呆けて居るぞと初電話
今日の風は秋よと豆腐売が言ふ
放鳥で終る告別春の雲
遠くより一つの視線落葉降る
紅梅のことさら濃きを指させり
夜話やむかし寝間着はフランネル
旅の夜の炭火は赤し朴葉味噌
小鳥よく見え寒林に鼓動あり
春着着て新嫁たすき携へて
ぼたんゆきときにおろかな母の愛
秋風や蝋涙となる絵らうそく
わが死後も残る硯を洗ひけり
子等の歩の速し花野をゆく帽子
金のピアス落して戻る夜のさくら
月明の水に棲むもの水揺らす

のうぜんに手触れたき子に肩車
戦火の日よりの交り菊膾
髪上げし一と日は若し黄水仙
病む金魚二匹相寄る冬陽の底
凍裂の樹の壮絶を見し星か
燕の子帆船は帆を全開す
節分の病人食の鰯かな
君逝けり白地着て行くところなく
秋雲や漂ふごとき夫の試歩
梅雨の傘払ひ太宰の忌とおもふ
包みこむ女身の重み夏衣
訣れきて花アマリリス赤すぎる

『水瓶座』の作品は瀧春一先生の篩を経た作品で構成されてゐる。その上での林翔先生の選、名句揃ひなわけである。わたしと藤穂さんとの交誼はこれからも続いていきます。

悼

ほれあそこミモザの花よ春の闇　竹　僊

表札に家族全員花ミモザ

あをキーワード俳句辞典（やき―やさ）

野菜

初午や心清める根野菜　東　亜未
野菜便草取虫取雨天気　東　亜未
木枯に土けぶり上げ野菜畑　鈴木多枝子
朝市に荷を広げたる春野菜　田中　藤穂
猫車に並びて売らる夏野菜　赤座　典子
産直の野菜の香湖澄めり　森　理和
冬野菜砂振り分ける象の鼻　東　亜未
マヨネーズまとひて元気冬野菜　鎌倉喜久恵
春野菜賣場にあふれ見て歩く　長崎　桂子
なまくらに初夏の野菜の乱れをり　長崎　桂子
夏至の日の雨のちくもり野菜便　東　亜未
野菜便先づ芋虫を探し出す　東　亜未
稲藁で縛られてをる秋野菜　長崎　桂子
コンピュータ管理の野菜昭和の日　藤野　寿子
秋うららいびつな野菜戴きて　長崎　桂子
モーニングコールは浅漬の夏野菜　木村茂登子
消息は手作りといふ夏野菜　木村茂登子
墓参して地元の野菜買ふ師走　長崎　桂子
桐の花野菜畑の真中に　長崎　桂子
夏野菜産地直送支援策　長崎　桂子
夏野菜素揚げのことにズッキーニ　木村茂登子
青空市野菜と並ぶ胡蝶蘭　赤座　典子
その中のことに秋茄子京野菜　木村茂登子
まづは目で味はふサラダ夏野菜　木村茂登子
ドレッシングに甲と乙あり春野菜　木村茂登子
野菜畠ぬけて彼方へ梅雨の蝶　山荘　慶子
両の手に持ちきれぬ程夏野菜　大日向幸江
野菜室使ひ切りたし夏の旅　石森　理和
白い花夏の野菜の実り待つ　長崎　桂子
取りたての夏野菜はや紙湿る　赤座　典子
夏野菜あるだけ入れしカレーなる　森　なほ子
路地裏に爺の売りぬる夏野菜　秋川　泉
年始よふ畑の野菜買いに行き　大日向幸江
冬野菜リックに背負ひ家遠し　秋川　泉
ベーグルに春野菜添へ店構　長崎　桂子
春野菜地産地消を応援す　赤座　典子
賑賑し野菜の露店花水木　長崎　桂子

優し

秋海棠優しく咲いて秋の庭　河合　笑子
頬染めし林檎に優し小糠雨　松本　米子
春障子優しき声の洩れて来る　栢森　敏子
昼顔の優しく咲けり古代より　河合　笑子
春北風優しい言葉探してる　須賀　敏子
無視すると云ふ優しさも犬ふぐり　篠田　純子
優しくも冷たくもあり水仙花　斉藤　裕子

下石神井日録　9

佐藤喜孝

六月初旬　いつも通る道と違ふ道をきょろきょろしながら自転車を漕いでゐた。お寺かと思ふお屋敷が樹木で道を暗めてゐるところもある。二階建ての屋上からジャスミンの白い花が雪崩れてゐる一軒があった。庭の奥に喬木が白い花を被ってゐる。見たこともないので自転車を停めた。六月号表紙の写真だが、よく写ってゐないので分かりにくい。帰宅して調べてもよく分からない。素人判断で「メラレウカ　スノーインサマー」と決め勝手に落ち着いた。オーストラリアの木ださうだ。遠くまで運ばれてきたものだ。樹頭に花が咲く。ふはふはの花なので、綿か雪を被った様だ。この後見る機会を逸してしまった。

六月中旬　いつもの公園で杖を突いてゐると、喫泉ンに藤の花が置かれてゐる。今頃をかしいなと藤棚の下を覗くが、一房も下がってゐない。きょろきょろしてたら、ぼさぼさに繁った藤棚の上に数花見つけた。来年はちゃんと藤棚を見てやらう。

六月下旬　しばらくぶりに吟行が出来た。私のために私が行きやすい三宝寺公園にしてくださった。当日は過ごしやすい気温で助かった。残念なのは茶店が都合でお休みといふ張り紙が張られてゐたこと。それぞれ見たものに収穫があったやうだ。俳句の収穫はこれからが楽しみ、たのしみしてゐる。私の夢は三宝寺池を一周すること。他愛ない夢である。それにしても大きな緑を見るだけで心がやすまった。

下の写真は十一月の三宝寺です。またの御来駕お待ちしてます。

あとがき

追悼号

藤穂さんの追悼号を親交のあった方にもお願ひいたしました。各人それぞれの思ひを、それぞれの形式でご寄稿いただきました。ありがとうございました。

雨

すこし前、テレビで水ガメが底をついてきたと、干乾びたダムの映像を流し。農業用水が足りずに苦労をしてゐる様子を見た。それがあっと云ふ間に家は浸水し、田畑も水没の映像でテレビがにぎはってゐる。これが地球温暖化の影響なのだらうか。わたしの生存中にコロナは収まりさうもない。

随筆の題・『夏のたべもの』

夏のたべものと云へば涼味の湧くものがまづ浮ぶ。心太・鴫焼・冷し中華・柳川鍋etc。果物で云へば西瓜だらう。今は冷蔵庫で冷やして食べるが、私の子供のころは盥の水にぷかぷか浮かべる。桃など浮かぶと風物詩だ。蛇口の下に西瓜を置き、西瓜に手ぬぐいかタオルを被せて冷やすこともした。であるから冷蔵庫で冷やしすぎた西瓜は風味がない。井戸があればなほよい。縄で括られた西瓜が井戸から上がってくる。井戸の暗い穴の中に何時間もゐた西瓜の気分になってしまって。その西瓜を食べたの食べなかったのか、幼時のこととて記憶にない。（喜孝）

二〇二二年七月号
発行日　七月十八日
発行所　〒177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2　一階
電　話　090　9828　4244
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番　018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）